

1. 奈良時代までの言語と社会—日本語が誕生する

奈良時代までの概観

縄文時代・弥生時代を経て、古墳時代に入るのが三、四世紀のことですが、この頃から大和朝廷は日本列島の支配を次第に固めていきます。七世紀後半になると、中国から律令制度を取り入れて国家としての体裁を整え、本格的な都城の造営も行われました。そして、七九四年に平安京に遷都されるのですが、それまでの時代をここでは扱うことにしましょう。

八世紀に成立した資料には『古事記』『日本書紀』『風土記』そして『万葉集』などがあります。これらは正式の漢文（純漢文）、または日本語的な要素の混ざった変体漢文（和化漢文）で書かれています。中には万葉仮名だけで書き記す万葉仮名文、また訓を主体とした表記もあって、日本語の最も古い姿が知られます。その具体的な手順については後で触れることにしますが、右のような書物を通して知られる言葉は奈良・飛鳥を中心とした畿内の、しかも主に貴族階級の言語です。その上、残された資料が歌謡・和歌に偏っていますので、次の平安時代の言語と比べると少し注意が必要です。つまり、歌の言葉が主となる奈良時代以前の文献に、ある語・表現が見られないからといって、それらが当時において口語で用いられていた可能性をまったく否定しきれないのです。

奈良時代の方言

中央語以外の言葉については、『万葉集』巻一四の東歌や巻二〇の防人歌を通して東国（北海道を除く東日本）の方言が知られますが、それらは大和地方の言葉とはやや異なった体系を持っていました。

知々波々我可之良加伎奈弓佐久安例弓伊比之氣等婆是和須礼加祢豆流（万葉集 四三四六）

右は駿河国（今の静岡県）出身の防人の歌です。第二句までは「父母が頭かき撫で」ですが、第三句「さくあれて」は「幸くあれと」の転、第四句「いひしけとばぜ」は「言ひし言葉ぞ」の転、第五句は「忘れかねつる」で、全体の意味は〈父と母が頭を撫でて、元気でいろよと言った言葉が忘れられない〉となります。ここでは中央語の才段の音が工段の音となる例が見られますが、音韻が対応しているという点から見て基本的には同じ系統の言葉であり、方言として扱うことができます。

今日に至るまで東日本と西日本の言語の違いが引き継がれていますが、そのような対立がすでに奈良時代において確認できることは幸いなことだと言えましょう。『万葉集』以外にも『風土記』などにその土地の言葉が記されている記事が見えます。たとえば、「国巢 俗語云都知久母、又夜都賀波岐」（常陸国風土記 茨城郡）、「土齒池 俗言岸為比遲波」（肥前国風土記 高来郡）という記事から、凶暴な土着民のことをいう「くず」を常陸（今の茨城県）の言葉では「つちくも」または「やつかはき」と言い、「さし（岸）」のことを肥前（今の長崎県・佐賀県）の言葉では「ひぢは」と言うことが知られます。

言霊思想

この時代の資料から確認できるもう一つの特徴は、言霊思想が色濃く反映している点です。たとえば、『万葉集』の冒頭を飾る雄略天皇の長歌には、「名告らさね」というように、若い女性に名前を言うように求める場面が歌い込まれています。古くは、女性の実名が他人に知られることを忌避し、その本当の名前は実の親兄弟など以外では、夫のみが知り得るものであったのです。つまり、名前を相手に知らせるということは結婚を許諾するということから、その歌は典型的な求愛の歌ということになります。

このように実名がわからないというのは平安時代も同様で、「紫式部」は「若紫の物語を書いた式部」、「清少納言」は「清原の少納言」というあだ名です。『蜻蛉日記』の作者は藤原道綱(兼家の子)の母、『更級日記』の作者は菅原孝標の女というように親族関係で仮に呼称したものにすぎません。

言葉に精霊が宿るとして、言葉の威力を畏れるという考え方は世界に共通するものです。人々はこの言語観に基づいて、幸福、または逆に災いをもたらす言葉を残しています。

是の神風の伊勢の国は常世の浪の重浪帰する国、傍国の可憐し国なり(日本書紀 垂仁紀)

〈この(神風の)伊勢の国は常住不変の国の幾たびも波の打ち寄せる国、大和の脇の美しい国である〉

ここでは国を褒めることで、その未来を祝福しているのです。また、ワタツミノ大神が、釣り針に呪いをかけるとき言葉として次のような文句を教えています。

此の鉤は、おほ鉤、すす鉤、貧鉤、うる鉤(古事記 上)

チは釣り針のことで、この「鉤」を持った者は、心がふさぎ、たけり狂い、貧乏になり、愚かになるという、まじないの言葉です。言葉に出すことによって、実際にそのことが起こるといふ暗示には、底知れぬ威力を感じていたのです。

このような言葉の力は諺として後々まで残されてもいきます。「痛き瘡には鹹塩を漉く」「重き馬荷に上荷打つ」(万葉集 八九七)や「堅石も酔人を避く」(古事記 中)など、諺には人々の知恵が反映されています。前者は、ひどいことは度重なるということ、後者は、酔っぱらいには近づくなということを言い伝えているのです。

2. 伝来した漢字はどのように使われたか

無文字の時代

さて、日本語は漢字と仮名で書かれています。しかし、古くからそうだったわけではありません。

漢字はもともと中国語を書き表すために作られたものです。それが日本に伝わり日本語を書き表す場合にも用いられるようになりました。では、漢字が日本に伝わる以前はどうだったのでしょうか。漢字に代わる文字があったのでしょうか。この答えはノーです。

漢字が伝わる以前の日本は無文字社会でした。文字はありませんでしたが、「結繩」と呼ばれる、縄の結